

横浜市立桜岡小学校旧蔵役行者像

花澤 明優美

る。両脚を垂下して倚坐する。高下駄を履く。

法量(単位cm)

総高 一六〇・一(五尺二寸八分)

像高 一〇三・〇(三尺四寸)

髮際高 八〇・八(二尺六寸七分)

頂―顎 四三・九 面長 二一・九

面幅 一七・六 頭部張 二四・九

面奥 三〇・八

胸奥(左) 二八・五 胸奥(右) 二九・七

腹奥(現状) 三四・〇 肘張(現状) 六六・四

袖裾張 七〇・七

品質構造

材木はカヤとみられる針葉樹。寄木造り。玉眼を嵌入する。

頭・体部は別材製。

頭部は後頭部の材を主材として下方に首柄を作り出す。その前方に面部材を短く。後頭部材は内削りを施す。面部材は前後二部に分かれ、

横浜市歴史博物館では、横浜市港南区の市立桜岡小学校郷土資料館旧蔵の役行者像を保管している。本像は銘記から文化十四年(一八一七)に仏師世啓によって造られたことが知られる。神奈川県立歴史博物館特別展「天狗推参！」(平成十年九月二十五日～十月三十一日)に出陳されているが、同展図録掲載の解説の他に詳細の報告はない。現在、脚部が体部から離れた状態で保管されているが、二〇二二年度横浜市歴史博物館博物館実習生の協力を得て、仮組をして法量の計測を行った。その成果をその他の概要とあわせて紹介する。

(一) 像の概要

形状

木造、古色塗りの像である。

鬚の上から頭巾を被り、その下端が両肩前に垂下する。頭巾の肩にかかる部分の下に蓮弁型の飾りをつける(藤衣か)。額に三条の皺をあらわす。二重瞼、眼を大きく見ひらく。両眼の下に各二条の皺をあらわす。閉口。顎鬚を垂らす。筒袖衣、長袂衣をいずれも右衽に着ける。袈裟を懸ける。両手屈臂。左手は左膝上で掌を仰ぎ、全指を曲げて持物を執る。右手は右胸前で掌を内に向け、全指を曲げて錫杖を握

後部は上方一材と間隙を置いた左右二材から成る。

体幹部は正面左右二材と背面の襟から地付きに至り横に並べる三材を刳いで、内刳りを施す。背面三材は地付きを刳り残す。両側面に各一材を刳ぎ、内刳りを施す。脚部は両腿から両膝までをなす上面に横木一材を刳ぎ、内刳りを施す。膝下から両足首までをなす横木一材を刳ぐ。体幹部と脚部上面材の間に一材を挟む（左右二か所に柄穴が残る）。頭部背面の薄材、口鬚半ばから先、腹前、両肘部外側の薄材、両袖口、両手首先（挿し込み刳ぎ）、両足首先、以上別材製。

面部後半上方材は後補である。持物錫杖も後補である。

(二) 伝来

頭部背面の薄材裏面および後頭部内左側の内刳り面に左記の墨書があり、文化十四年（一一八一）七月に法橋世啓および友吉によって造られたことが知られる。世啓は仏師界の伝統ある法橋位を名のるが、門弟友吉ともに管見の限り本像の他に作例は知られない。

（頭部背面薄材裏面）

文化十四年七月吉日

御用大仏師

法橋世啓

門弟友吉

（後頭部内左側面）

文化十四年

その他の伝来は不明である。

(三) 像の特徴

本像は修験道の開祖である役小角の姿をあらわしたものである。役小角は七世紀後半から八世紀頃の宗教者で、鎌倉時代初期以降、修験道の始祖に仮託され、役行者と呼ばれて信仰されている。造立年代の明らかない役行者像の作例で最も古いのは、弘安九年（一一二八）慶俊作の奈良国立博物館像である²⁾。以降多くの作例は、頭巾を被り、裾の短い衣を纏い、高下駄を履いて岩座の上に腰かけ、右手に錫杖、左手に巻物を持つ姿で、長い顎鬚を垂らし、開口する忿怒形であらわされる。本像も通例の役行者像の姿をあらわすが、忿怒形を基本とする役行者像のなかでは比較的穏やかな面貌である。また、頭巾の下にあらわされる藤衣など形式化した表現がみられる。等身像として造られたとみられ、このような規模の役行者像の製作背景を、伝来を調査したうえで検討する必要がある。

注

1 梅沢恵「80役行者倚像」〔『特別展 天狗推参！』所収〕二〇一〇年九月、神奈川県立歴史博物館。

2 岩田茂樹「役小角像」〔水野敬三郎他編『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇一四所収〕二〇一八年二月、中央公論美術出版。

〔横浜市歴史博物館 学芸員〕

〔写真1〕 役行者像（神奈川県立歴史博物館『特別展 天狗推参！』より転載）



〔写真2〕 役行者像頭部背面薄材裏面

